

多文化間アドバイジングとカウンセリングの深化 ～新組織の発展と多様な学生たちの活躍に向けて～

国際教育交流センターアドバイジング部門

田中 京子・高木 ひとみ・田所 真生子

1. はじめに

組織改編から半年を経て、模索や工夫を重ねながら組織運営や部門業務にあたってきたが、この間名古屋大学が、国内で重点的に国際化を進める「スーパーグローバル大学」として採択されたことで新たなプロジェクトも立ち上がり、目まぐるしく動く一年間であった。様々な混乱があることを覚悟して臨んだ組織改編前後の過渡期が、新たな課題も加わって今しばらく続くようである。関係者それぞれが自身の心身健康管理をしながら、互いに信頼関係を築けるように協力しながら、相談やカウンセリング体制の整備と内容の深化をめざして進んできた。

2. 教育活動

(1) オリエンテーション：情報提供、信頼関係・交流、多文化理解の促進

留学生の渡日前から修了後にいたるまでの参加型、交流型、日本語・英語併用オリエンテーションを継続・充実させた。

【渡日前オリエンテーション】（日本語研修生、日本語・日本文化研修生所属学生対象）

例年と同様、国際学生交流課および入学予定者の進学先部局担当者と協力し、ウェブ上で渡日前情報、入学予定者のためのガイドブックを得てもらうよう案内した。

【到着後オリエンテーション】

・全学新入留学生オリエンテーション

春と秋の新学期に、国際学生交流課および国際教育交流センター・国際言語センター関連部門と協力して、オリエンテーションを行なった。

・G30プログラム新入学生向けオリエンテーション

秋の入学前に、関連部署と協力して、生活オリエンテーションを行なった。

・日本語研修生、日本語・日本文化研修生所属学生対象オリエンテーション

研修生の所属は国際言語センターであるが、到着後の区役所登録、学生登録、オリエンテーションを国際学生交流課と協力して4月と10月に数回に分けて行なった。

・国際交流会館オリエンテーション

新学期にはそれぞれの会館で、チューターが主催して新入居者に対するオリエンテーションを行っており、アドバイジング部門教員はそこに参加し挨拶等を行なった。

【帰国前オリエンテーション】（日本語・日本文化研修生対象）

国際学生交流課と協力し、プログラムを終えて9月に帰国する研修生に、帰国のための各機関での事務手続き等、帰国後の過ごし方などについて、オリエンテーションを行なった。

【交流型オリエンテーション（ワークショップ）】

例年通り、世界の言語・文化を学ぶワークショップを地域のボランティア講師の協力のもと行った（本年報「事業報告」中の「国際的人材育成のための多言語・多文化理解ワークショップの展開」を参照）。日本文化紹介のセッションでは、基礎セミナーと連携し、後期は書道セッションの企画、進行を一般学生から募って行った。

(2) 国際教育交流プログラム

【学生パートナーシッププログラム】

国際交流を希望する学生の登録により、一般学生と

留学生を1対1で紹介し自由に交流する「きっかけ」を提供している（今年度の登録者数は一般学生32名、留学生6名、マッチング2件）。交流のニーズ、目的等が合わずマッチングできない場合も多いため、主に登録者に学内外の交流イベント、海外留学に関する情報をメールにて提供した。また、登録に際して行う面談で聞き取った個々の興味をもとにランゲージシャワーでの新たなプログラム企画・運営の提案をし、6名の登録者が活動した。国際言語センター研修生のチューター募集情報も登録者に向けて発信し、うち3名がチューター支援を行なった。

【スモールワールド・コーヒーアワー】

2014年度は、参加者にとって、スモールワールド・コーヒーアワー（以下、コーヒーアワー）の場が「アットホームな大家族」と感じられるよう目標を掲げて活動を行った。通常、前期3回、後期3回、計6回のコーヒーアワーを開催しており、本年後は下記のテーマで行った（カッコ内は参加者数）。4月「うそつき自己紹介」（約110名）、5月「俳句づくり・しおりづくり」（約70～80名）、7月「アート・カフェ」（約110名）、10月「自己紹介ビンゴ」（約70～80名）、11月「しおり作り・おすすめの本紹介」（約30名）、1月「かきた・福笑い」（約30名）。

コーヒーアワーのイベント開催は月に一度であるが、学生スタッフがその準備のため各回につき、毎週1～2回のミーティングを重ねて企画運営をしている。テーマを考えるには毎回工夫が必要となる。多数の参加者があり、入退場自由なイベントであるため、どのようなアクティビティであると来場者が参加しやすく、有意義な交流を促進することができるのか、多

文化への理解を深める視点も考慮しながら企画を行った。今年度は学生スタッフにイスラム文化圏からの学生もおり、コーヒーアワー中に提供するお菓子をハラールとノンハラールに分け、分かりやすく提供する必要性についても学び配慮するようにした。

4月と10月は新入留学生も多いため、自己紹介系のアクティビティを行っている。今年は、参加者が気軽に日本文化に触れることができ、活動を通してリラックスできるような機会を提供する内容のものが多かった。俳句づくりを通して自己表現したり、団扇作り・しおり作りを通して、楽しさの体験やリラクゼーションを促したりした。

名大祭では、他国際交流グループと協力して、フリーマーケットを開催している。フリーマーケットの売り上げをコーヒーアワーの運営費の一部に当てており、学生がさらに主体的に企画・運営しやすい環境を作っている。

コーヒーアワーのイベント中に見られる効果もさることながら、企画運営活動を通じた学生の人材育成という側面も持っており、学生たちの力を発揮する場や成長の場を提供している。



【世界が広がる22秒～プレゼンテーション・アワー～】

留学生支援事業の助成を受け、学生のプレゼンテーション能力を高め、アカデミックな交流の場を創出することを目的に、2014年12月5日、グローバルプレゼンテーション大会「世界が広がる22秒～プレゼンテーションアワー～」を開催した。コーヒーアワー特別企画と位置づけ、学生による実行委員会を作り半年間準備した。プレゼンテーション形式はシンプルな形とし、プレゼンターは22枚のスライドを用いて、1枚につき22秒語ることができるというガイドラインを設けた。当日は学生発表者4名、ゲストスピーカー2名、計6名の発表者が日本語や英語を用いて研究内容や趣味・関心を披露し、それぞれの創意工夫を凝らした効果的なプレゼンテーションを行った。本プログラムで教育成果を得たのは、発表者として参加した学生だけではなく、発表を聞きにきたイベント参加者の学生たちにも及んだ。同世代の学生から魅力溢れるプレゼンテーションを聞くことでアカデミックな刺激を受ける機会となった。本プログラムを企画した実行員学生が、平成27年度も継続して実施していきたいと希望



し、既に名古屋大学同窓会支援事業の助成金に申請し、採択されている。今後も学生が自ら発信し、アカデミックな文化交流の場の創出につとめたい。

【MEIPLES：名古屋大学グローバル・リーダー育成プログラム（メイプルズ）】

IF@N:名古屋大学国際学生フォーラム（アイファン）】

本年度でMEIPLESは3年目、IF@Nは5回目を迎えた。留学生・一般学生を問わず、国際的に活躍できる人材を育成することを目的に、包括的なプログラムとしてMEIPLESは誕生した。

本プログラムは、大きく二つのパートに分かれる。まず前期では体験学習を取り入れたワークショップ・セミナー形式で、国際交流概論や多文化環境におけるコミュニケーション、自己理解と他者理解、問題解決やディスカッション方法、さらに、アジェンダや議事録の作成方法といった実務について学ぶ機会を持った。そして後期では、前期に培った知識やスキルを磨く実践編としてIF@Nの実行委員会活動を行った。MEIPLESとIF@Nの実行委員会活動とフォーラム内容の詳細については、本紀要の事業報告と学生実行委員によって作成された『第5回IF@N：名古屋大学国際学生フォーラム活動報告書』、『名古屋大学国際交流グループ 2014年度活動報告書』をご参照いただきたい。

前期の活動には11名の登録メンバーが参加していた。後期のIF@N実行委員会活動は、10名とTAとして関わってもらった院生1名、英語サポーターの学生1名を含む12名で行った。本年度は、MEIPLESそしてIF@N実行委員会の活動を他大学の学生にも開いたため、他大学から2名の参加があった。また、初めてG30プログラムとNUPACEの学生が正式な実行委員会メンバーとなった（これまで英語サポーターとしての参加はあった）。

11月15日に開催されたIF@N当日には21名の参加者があり、ファシリテーターを加えた33名が熱いディスカッションを通して、有意義な一日を過ごした。英語を使用言語とするグループが二つ、日本語を使用言語とするグループが二つあり、それぞれのグループで工夫や協力をしながらディスカッションが進められ、参加者やファシリテーターの輝く姿が印象的であった。フォーラムの終了後は、実行委員として活動の振り返りや報告書の作成を行った。長い活動の最後に修

了式を行い、実行委員の学生に修了書・感謝状を授与した。

【多文化間ディスカッショングループ】

本年度は多文化間ディスカッショングループを前期、後期に1グループずつ開催した。前期、後期ともに、毎週木曜日の3限に開催し、参加者は10名ずつ、計20名であった。定期的に同じメンバーで、テーマに基づいて語り合う機会を創出した。ディスカッションのテーマは、参加学生たちがアイデアを出し、「テレビ番組」、「休日の過ごし方」、「おすすめの観光スポット」、「異文化体験から学んだこと」、「大学は勉強するところ？遊ぶところ？」、「日本における教授と学生との関係」、「日本人の就職観」、「日本・日本人の好きなところ、変えていかなければならないところ」、「夢リスト」等について語り合った。学部1年生から、研究生や大学院生まで参加し、所属学部・研究科にも幅があり、年齢や分野を超えて、互いに学び合う場面が多く見られた。学部生にとっては、他学生や先輩と繋がることができ、多様な情報を得られると同時に、大学に対して抱いている疑問など相談できる場ともなっていた。研究生や大学院生にとっては、日常の研究生活から離れ、入試や研究のストレスを低減させ、リラックスできるような場となっているようであった。今後このようなサポートグループの機能を持った多文化メンバーによるグループ活動を続けていきたい。

【名古屋大学グローバルネットワーク（国際交流グループ）活動報告】

名古屋大学グローバルネットワークとは、国際教育交流センターが顧問や支援する国際交流グループの連携を促すことを目的に2009年から存在している学内ネットワークである。現在は、8グループ（スモールワールド・コーヒアワー、ヘルプデスク、ランゲージシャワー、留学のとびら、名古屋大学グローバルリーダー育成プログラム MEIPLES, English College, 異文化交流サークル ACE, 名古屋大学留学生会 NUFSA）が共同で活動報告書を作成している。また、ゆるやかな連携のもと、各グループへの参加学生募集の広報活動やフリーマーケットなどを行っている。

本年度は、4つの学生グループ（留学のとびら、ヘルプデスク、スモールワールド・コーヒアワー、English College）が共同で、名大祭の際にフリーマー

ケットを出店した。売上げは、各グループの活動資金となった。さらに年度末には、共同で年間活動の報告書を発行した。報告書は、アドバイジング部門のホームページに掲載されている。（<http://www.acs.iee.nagoya-u.ac.jp/program/introduction.html>）

より多くの学生たちが国際交流活動に参加できるようアドバイジング部門を中心に毎年、国際交流活動のリーフレットを発行しており、名古屋大学グローバルネットワークの国際交流グループを紹介している。リーフレットについては、アドバイジング部門のホームページを参照されたい。

（<http://www.acs.iee.nagoya-u.ac.jp/doc/2014Inter%20exchange%20Act.pdf>）

【自己表現・即興ワークショップ】

本年度、国立大学改革強化推進補助金を受け、「学生の主体性、創造性、イノベティブな力を育成するためのワークショップ事業」として「自己表現・即興ワークショップ」を開催した。近年、即興演劇（インプロ）の手法を研修や授業に取り入れる企業や教育機関が増えている。国際化が加速し、多文化環境下で活躍できる人材が求められる中で、様々な状況において臨機応変に対応できる「即興力」を養うことを目的に、キャリア支援部門、海外留学部門の協力も仰ぎながら、3回シリーズの本ワークショップを行った。開催にあたり、日本全国様々な地域で活動を行い、企業や大学等教育機関、コミュニティでの研修に実績のある、即興演劇集団「ロクデイム」を講師として招聘した。第1回は導入セッションとして、ロクデイムメンバー6人による即興演劇パフォーマンスを皮切りに、後半は参加者を巻き込んだ体験型ワークショップを行った。第2、3回はそれぞれ発展セッション、応用セッションとし、ロクデイム主宰の2名を講師としてお招きし、即興演劇の手法を用いた体験型ワークショップを行った。参加者は延べ75名であった。本ワークショップには、留学生に加え、学内外の学生や教職員も参加し、立場や垣根を越えた共修の場となった。詳しくは、本紀要の事業報告と実践・調査報告をご参照いただきたい。

【学生組織との連携】

・異文化交流サークル ACE

ACE (Action group for Cross-cultural Exchange)

は様々なプログラムで名古屋大学に訪れる留学生の生活のサポートや留学生と一般学生の交流を促進するためのイベントの企画・運営を行う学生団体である。田所・高木が顧問を担当し、ACEの活動が広く留学生に周知されるよう情報提供に協力した。また名古屋大学留学生会(NUFSA)とACEが協働で行っているバザーやウェルカムパーティーの運営に関する助言を行った。

・名古屋大学留学生会(NUFSA)

NUFSAでは、全学の留学生を対象とした、春と秋の留学生のためのバザーやウェルカムパーティーの他、スポーツ大会やスイカ交流会といった様々なイベントを行っている。NUFSAは名古屋大学留学生後援会から毎年補助金を得ており、名古屋大学の留学生にとって有益な活動が提供できるよう取り組んでいる。田所・高木が顧問を担当し、活動に対する助言や会計報告書作りの指導を行っている。

・愛知留学生会：愛知留学生会後援会の緊急援助金審査員および同援助金会計を2012年度から田中が担当し、事故や病気等で急な経済的困難に陥った愛知県内の留学生への支援について、申請受け付け、審査、支給、会計を行なっている。2014年度も十数件の支給をした。

・中国留学生学友会：当会が主催または共催する行事等について、相談を受けたり大学との連携調整について協力したりした。また、当会が定期的に行なう球技練習のための学内施設利用について、引き続き責任者として申請承認している。また今年度は、当会で中国人学生を対象にした「危機対応マニュアル」を編集する予定とのことで、情報収集についての相談があった。

・名古屋大学イスラム文化会(ICANU)：当会が主催する国・地域文化紹介行事や、イスラム文化紹介の行事について、また毎週金曜日に行なう集団礼拝について、相談を受けたり大学との連携調整に協力したりした。これらは約10年間大きな問題なく進められてきたが、今年度は学外の人から金曜集會に侵入するという予告があり、万一の場合を考えて学内外関係者と協力して安全策を講じた。今年は特に世

界各地でイスラームを名乗る組織や人々が犯罪や過激な言動を強め、平和を求める人々にとって不安要素が多い一年であった。ICANUや関係者もよりよい連携が必要とされた。また今年度は、学内施設関係者によってユニバーサルデザインキャンパスガイドライン策定が進められ、ICANUも情報提供等に協力した。他大学やメディアからハラール食や礼拝場所の視察や取材が複数回あり、適宜ICANUが協力した。また、ムスリム研究者が急死した際には、関係者との通訳や調整に協力した。これまでの本会活動や大学との関係については、アドバイジング部門で概要をまとめ、国際教育交流本部会議で報告した。

(3) 学生個別教育：相談

相談室での相談活動を「個別教育」と位置づけ、名古屋大学の留学生に限らず、在學生や他大学へ進学した学生、地域構成員などの相談にも可能な限り対応した。

【相談時間】

組織改編に伴って、場所も移動したため、相談は予約制としたが、予約のない時間で在室中は適宜相談に対応した。電子メールでの連絡は常時受け付けている。相談件数は、様々な形や内容での相談について数値として残すことが難しいが、事務やボランティアとの連携による留学生の生活支援、オリエンテーションによる情報提供・文化理解促進、電子メールでの相談対応、問題防止に役立つ交流プログラムの企画・運営、メンタルヘルス相談員への紹介などの役割の中で、関連する相談が例年と同様にあった。

【相談内容】

様々な相談の詳細その背景については、相談者個人に関わることなので報告することができない例が多いが、今年度の特徴として以下を報告し、今後の活動に活かしていきたい。

■指導教員・研究室

研究指導の仕方や研究室での人間関係について、疑問や悩みが寄せられた。所属部局の留学生担当教員(2013年10月からは「国際化推進教員」)や学内外関連機関と適宜協力しながら、疑問の払拭や問題の解決に

あたった。特に立場が上になる教員などの、責任と自覚がなお一層必要であると共に、互いの期待と現実が大きく乖離しないよう、指導教育の形や内容について初期の共通理解持つことが必要であると考え。学生へは、疑問に感じるがあったら問題化しないうちに相談できる場所があることを、オリエンテーションや日々の活動の中でさらに周知していきたい。

海外の大学から受入れ許可を得たため日本での研究を中断するかどうか、家族の不幸が重なったため帰国したいがどのように研究を継続できるか、大学院後期課程の自律的な研究環境に馴染めないなど、進学先や進路についての相談もあった。

■学業

学業不振が続き、授業に出席できない状況や引きこもりの状態になり、留年する学生たちがいた。指導教員、所属部局の国際化推進教員や職員、さらに学内外の専門家と連携し対応した。必要に応じて、家族にも連絡し、家族からの協力や同意を得ながら、対応を進めた。学業不振が続くと、回復にも時間がかかる傾向が見られる。学業不振を予防する教育支援の方策、また初期の段階における部局や指導教員・クラス担任等との連携の体制づくりが、今後必要だと考えられる。

■医療・健康

研究室の環境や人間関係、日本における生活習慣に馴染めず心身の健康を損ねる学生たちがいた。適宜専門家に繋ぎ、対応した。必要に応じて研究室への働きかけも行なった。留学生の場合家族が近くにいないことがほとんどのため、大学の責任はより大きく、迅速に専門家に繋ぎ対応することが必要である。留学生を優先して診察や治療にあたる精神科医の必要性が高まっているため、アドバイジング部門に一名の精神科医ポストをつけるための検討を進め、来年度から実現できることになった。

■飲酒

20歳未満飲酒禁止の法律遵守について、近年は特に厳しく呼びかけられている。学外での歓迎会の席や、学内であっても学生寮などで徹底されないことがあり、法律違反した学生と面談したり、全体への注意喚起をすることがあった。

■国際交流学生グループ

名古屋大学留学生会 (NUFSA) や名古屋大学イスラム文化会 (ICANU)、中国留学生学友会等からの相談があった。会が主催する行事についての相談、運動施設利用にあたっての申請や連絡、日々の礼拝やコミュニケーションについてなどである。部門としては、学生たちが文化交流やメンタルヘルス上必要な活動ができるような多目的室の必要性を機会あるごとに大学関係者に伝え、今年度は学生グループと協力しながらユニバーサルデザインキャンパスのガイドライン策定にその必要性を盛り込めるようにした。その他、名古屋大学で活躍している様々な国際交流活動グループからの相談に応じた。

■交流活動

パートナーシップ、ホームステイ、ワークショップ等の参加登録などで相談室を訪れる学生たちもいる。その機会に、交流や進路、外国語学習についての相談を受けることもある。様々な交流プログラムを紹介したり、言語を臆することなく積極的に使って実力をつけるよう助言したりしている。

(4) 授業

昨年度に続いて、今年度も日本の伝統文化を学び英語を使って発信する基礎セミナーを開講した。一部の授業を公開し、本センターの日本文化を学ぶワークショップとの連携講座とした。

大学院国際言語文化研究科の「多文化コミュニケーション論 a/b」の授業は12年目となり、多文化参加者チームで授業を進めた。

また、今年度も後期の教養科目「留学生と日本—異文化を通しての日本理解—」を浮葉教授を代表とする教員チーム（高木、渡部、田所）により開講した。

さらに今年度は、新しい試みとして、英語による全学教養科目「留学生と日本—異文化を通しての日本理解—」（田所）、G30教養科目“Exploration of Japan: From the Outside Looking Inside”（高木・今井・星野）を開講した。

3. 大学国際化への貢献

(1) 大学主催研修会等への貢献

・教職員研修

4月には、新任教員研修のポスターセッションでアドバイジング・カウンセリング部門の紹介を行なった。11月には異文化コミュニケーションの講師(田中)、12月には留学生アドバイジングとプログラミングの講師(田所・高木)を担当した。

(2) 民間留学生寮入居希望者面接

留学生のために寮を提供している会社や団体が複数あり、入居希望者の面接を国際学生交流課の担当者とともに行なった。条件のよい寮へは、大学からの推薦可能定員を大きく上回る数の申請があるが、国籍の多様性や日本語運用能力の面で提供側の希望と申請者の条件が合致しないこともあり、今後の留学生寮の在り方について関係者間で検討を始めた。

(3) 国際交流会館チューター研修

インターナショナル東山・山手・妙見と留学生会館、および猪高宿舎には合計約22名のチューター学生がおり、入居者の生活支援や会館運営の補助を行なっている。アドバイジング部門がチューターを対象とした研修を行っており、今年度のチューターに対しては、5月28日と6月2日に同じ研修を行ない、すべてのチューターがどちらかの日程で参加した。

(4) 国際交流会館チューター選考

国際交流会館でチューターとして活動したい大学院生たちを、国際学生交流課の担当者とともに面接し、選考した。志の高い多くの学生たちと面談し国際交流について意見交換した。ここ数年はチューター経験者からの紹介を受けた学生たちが申請し、その中から選考してきたが、チューター業務についてより多くの学生に知ってもらい、適性を備えた学生たちをより広く掘り起こすため、公募を始めた。今後海外留学説明会などの機会を利用しながらチューターの存在を広く伝え、教育的価値を高めていきたいと考えている。

(5) 国際学生寮新設への協力・寮内教育の検討

平成29年(2017年)度に名古屋大学に新たな国際学生寮が建設される予定であるため、設計の段階から現場の意見が反映できるよう、関係部署に提案等を行なった。また、国内の複数の国際学生寮を視察したり関係セミナーに参加したりし、今後の寮内での共修体制について検討を始めた。

(6) ハンドブック等改訂

これまでアドバイジング部門が中心になって各種ハンドブックの改訂を行なってきたが、今年度より担当を見直し、『留学生ハンドブック』および『入学予定者のためのガイドブック』は国際学生交流課が、また『チューターハンドブック』はアドバイジング部門が教育交流部門の教職員と協力して改訂を行なった。

(7) 異文化適応リーフレットの作成

異文化適応のプロセスや対処法について周知し理解を促すために、異文化適応リーフレットを作成し、渡日オリエンテーション時に配布した。

4. 地域社会と留学生の交流への貢献

(1) 国際理解教育への留学生派遣

合計27件の地域組織等主催行事について、連携・協力した。依頼件数が増加し組織間や学生との連絡に必要な時間や作業が増えているため、今年度はホームページ上に派遣依頼書および報告書を掲載して、留学生派遣の仕組みを整備した。

(2) ホームステイ

アドバイジング部門では、留学生と地域とを結ぶホームステイ事業に取り組んでいる。今年度は年間9回のプログラムを行なった。

(詳細については本年報、事業報告編の「地球家族プログラム」を参照)

(3) 地域連絡会・留学生のためのバザー

本年度も地域連絡会を開催し、YWCA、ともだち会、地域のボランティアの方々、異文化交流サークルACEの協力により、名古屋大学留学生会(NUFSA)主催の留学生のためのバザーを4月、10月に開催した。年々バザーの提供品は減少傾向にあるが、近藤産興株式会社からの提供品(電化製品や自転車)により、バザーを継続することが可能となっている。留学生のためのバザーは、渡日直後やアパートで生活を始めた留学生にとっては生活用品を安い価格で購入することのできる機会であり、今後も継続してほしいという声があがっているが、物品の配達方法など課題がある。今後も他大学の取組みなどを参考にしながら、バザーの在り方を検討していく必要があると考えられる。

No.	行事年月日	行事名	依頼団体 / 依頼者	派遣数	備考
1	2014/5/24	できな祭 参加者募集	できな祭実行委員会		催行者へ直接応募
2	2014/6/7	青少年赤十字代表団海外派遣 事前研修会講師	日本赤十字社愛知県支部	1	モンゴル
3	2014/6/18	国際交流授業	春日井市立押沢台小学校	9	中国 (3), マレーシア (2), インド, インドネシア, ウズベキスタン, 韓国
4	2014/6/25	ぎふ長良川鵜飼	岐阜市商工観光部 観光コンベンション課	43	催行者へ直接応募
5	2014/7/12~ 2015/1/24	あいち海上の森大学	あいち海上の森センター		催行者へ直接応募
6	2014/7/13	御洒落名匠狂言会	狂言共同社	34	中国 (20), フィリピン (3), アメリカ (2), 日本 (2), ネパール (2), 韓国, 台湾, チェコ, ベトナム, マレーシア
7	2014/7/20 ~8/31	学生ボランティア募集	特定非営利活動法人 COCO アイランド		催行者へ直接応募
8	2014/8/1 ~5, 8/24~28	イングリッシュキャンプ in あいち	株式会社インタラック		催行者へ直接応募
9	2014/8/1	夏休みの自由研究への協力	名古屋市在住中学生 1名	1	マラウイ
10	2014/8/29	留学生へのインタビュー	西尾市立鶴城中学校	1	ガーナ
11	2014/9/4	文化祭での留学体験発表	愛知県立一宮西高校	2	催行者へ直接応募
12	2014/9/26	国際交流授業	愛知県立西尾高校	3	オランダ, 台湾, 中国
13	2014/9/26	中部地域レポーター募集	株式会社エスケイワード		催行者へ直接応募
14	2014/10/26	揚輝荘 秋の国際交流の会	揚輝荘の会		催行者へ直接応募
15	2014/10/26	翻訳ボランティア募集	愛知県教育委員会	1	トルコ
16	2014/11/8	留学生交流見学ツアー	名古屋を明るくする会	25	中国 (14), フィリピン (3), ウズベキスタン (2), モンゴル (2), アメリカ, オーストラリア, トルコ, ブラジル
17	2014/11/16, 12/21	インターナショナル フットボール交流会	クラブアトレティコヒラソル		催行者へ直接応募
18	2014/12/2, 9, 16, 20, 2015/1/13	日本語クラス学習者役	椙山女学園大学	4	催行者へ直接応募
19	2014/12/7	留学生対象秋のバス旅行	名古屋大学公開講座友の会 NU-COOL	35	催行者へ直接応募
20	2014/12/13, 14	インターナショナルパーティー	愛知県立千種高校		催行者へ直接応募
21	2014/12/21	留学生交流体験	石川県立金沢桜丘高校	7	インドネシア (3), タイ (3), マレーシア
22	2014/12/23 ~27	イングリッシュキャンプ in あいち	株式会社インタラック		催行者へ直接応募
23	2015/1/17	寄せ植え作り体験	昭和田役所		催行者へ直接応募
24	2015/1/23	国際交流授業	名古屋市立伊勝小学校	6	中国 (2), オランダ, スリランカ, タイ, モンゴル
25	2015/1/24	新春歓迎会	名古屋を明るくする会	14	中国 (10), アフガニスタン (2), フィリピン, ベトナム
26	2015/2/6	海星グローバル交流会	私立海星高校		催行者へ直接応募
27	2015/2/7	国際交流セミナー	私立海陽学園	4	イギリス, インド, オランダ, モンゴル
28	2015/2/16, 19	国際交流授業	名古屋市立正木小学校	4	タイ, 中国, ベトナム, モンゴル

計 行事数：28

依頼団体数：26

派遣留学生数：延べ110名（催行者への直接応募を除く）

参加者の出身国・地域：20ヵ国・地域（催行者への直接応募を除く）

(4) 警察との連携

名古屋大学が位置する千種区の警察署には、従来様々な形で学生たちへの安全指導に協力してもらっており、特に新入生が、日本の安全神話を過度に信じていることがないよう、これまでの経験も参考にしながらオリエンテーションなどで指導している。また学生集会などが、他人によって思わぬ方向に利用されることなく行なえるよう、学生グループとも協力している。学外者が学内行事への侵入を予告した事例においては、万一の対応について警察からも助言を得た。

(5) 研修会の開催

長年多くのボランティアグループが留学生支援や地域交流活動に携わっており、今後も大学と連携しての活動が期待されている。今年度はそれらのグループと共に学ぶ「ボランティア研修会」を開催した。

2015年2月10日

北海道医療大学 長谷川聡氏「ボランティア団体の課題と解決策」の講演他、報告やディスカッション

(6) 学外団体からの寄付

長年名古屋大学の留学生支援を継続的に行なってきた「公開講座友の会」から、元会員山本茂子様のご遺志により3,000万円が名古屋大学基金に寄付され、留学生支援のために大切にに使わせていただくことになった。その他、諸団体より、留学生支援への寄付や寄贈の申し出をいただいております、関係部署と調整している。

5. 研究活動

(1) 著書・論文・報告

- ・田中京子「日本留学の長期的成果～第三国に住むラテンアメリカ出身者の場合」『名古屋大学国際教育交流センター紀要』創刊号、名古屋大学国際教育交流センター、2014年10月
- ・高木ひとみ・田所真生子・渡部留美「事業報告：第2回「名古屋大学グローバル・リーダー育成プログラム：MEIPLES」第4回「IF@N: 名古屋大学国際学生フォーラム」」『名古屋大学国際教育交流センター紀要 第1号』p.166～168, 2014年
- ・渡部留美・田所真生子・高木ひとみ「事業報告：

グローバル・リーダー教育フォーラム開催報告」『名古屋大学国際教育交流センター紀要 第1号』p.169～171, 2014年

- ・田中京子・高木ひとみ・田所真生子「新体制での発進にあたって～組織改編に伴う過渡期から次なる発展へ～」『名古屋大学国際教育交流センター紀要 第1号』p.136～144, 2014年
- ・渡部留美・田所真生子・高木ひとみ共編著『グローバル・リーダー教育フォーラム～キャンパスにおける国際教育の実践報告書』名古屋大学国際教育交流センター、2014年
- ・高木ひとみ「学生の適応援助グループ：多文化間ディスカッショングループにおける実践」『留学生交流・指導研究』17号、国立大学留学生指導研究協議会、2014年

(2) 学会活動

- ・国立大学法人留学生指導研究協議会（COISAN）編集委員長（田中）
- ・異文化間教育学会 編集委員（田中）
- ・国立大学法人留学生指導研究協議会（COISAN）研究班（高木）

(3) 講演

- ・2014年7月4日国立大学法人留学生センター留学生指導担当研究協議会『文化的背景の多様な学生に対するカウンセリングの工夫：カウンセリングに馴染みのない学生への相談対応をどう行うか』「グループアプローチの活用による相談実践」話題提供（高木）
- ・2014年11月23日国際基督教大学ジェンダー研究センター開設10周年記念シンポジウム「境界と共生を問い直す」パネリスト（田中）
- ・2014年12月4日 第14回大学施設マネジメント研究会「名古屋大学キャンパス・ユニバーサルデザインマニュアル（キャンパスユニバーサルデザインの課題と展望）～留学生支援の視点から～」パネリスト（田所）

(4) 研究助成

- ・日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（C）「日本留学の長期的成果～グローバル展開と次世代への波及」2014～2016年（田中）

- ・日本学術振興会科学研究費補助金 若手研究 (B) 「大学院留学生のための多文化間調整能力を高めるための教育プログラムの開発」 2014年～2016年 (高木)

(5) その他

FD・SD 活動

- ・東山症例検討会 (保健管理室, 毎月開催) (高木・田所)
- ・留学生関係教職員スタディグループ (不定期開催) (高木・田所)
- ・2014年8月8日 多文化間メンタルヘルス検討会 開催
講師: 京都大学国際交流センター 阪上優准教授
- ・2014年9月 European Association for International Educators Conference 参加 (チェコ, 田所)

6. 社会連携

(1) 研修・講座講師

- ・2014年5月, 8月, 10月 日本プロセスワークセンターセミナー講師 (田所)
- ・2014年5月25日～6月1日 World Work Seminar in Poland ファシリテーターチーム (田所)
- ・2014年6月5日 緑生涯学習センター人権講座講師 (田中)
- ・2014年8月22日～24日 BRIDGE「国際教育の理論と実践を学ぶワークショップ」講師 (高木)
- ・2014年11月 産業カウンセラー自主勉強会研修講師 (田所)
- ・2014年12月12日 JAFSA 中級者研修「留学生アドバイジングとプログラミング～受け入れ留学生

を対象に～」(講師: 高木・田所, 他大学教職員2名)

- ・2015年1月20日 多文化共生推進協議会視察対応 (田中)
- ・2015年1月22日 名古屋中小企業振興会経営者フォーラム定例会「イスラーム文化と日本～学生たちとの協働を通して考えること」講演 (田中と名大修士生1名)

(2) 国際交流関係財団等の委員

- ・コジマ財団 評議員 (田中)
- ・愛知留学生会後援会 常任理事, 緊急援助金担当 (田中)
- ・愛知県国際交流協会 評議員 (田中)
- ・大幸財団 選考委員 (田中)

7. おわりに

冒頭にも述べたように, スーパーグローバル大学構想を元に様々なプロジェクトが本格化した一年であった。留学生相談においては, 重いケースや様々な連携を要するケースが増えてきた印象があり, 予防や対応をさらに充実させていくことが望まれるが, 平成27年度より新たに精神科医を本部門に配置することが可能になったのは朗報であった。また, キャンパスユニバーサルデザインに国際化や多文化・多様性の視点を盛り込むことができたのは, 多様な背景をもつ人々が共生・共修・協働していく大学として, 一歩前進したのではないかと思われる。今後もこれまで培ってきた知識や経験を活かしながら, 組織の変化や発展に関わり, 貢献していきたい。